

1982年に灯台、ハリポート、階段の工事が行なわれ、その攪乱された所から帰化植物のアメリカオニアザミが侵入、定着した。オオミズナギドリ繁殖地として国指定天然記念物級の価値があるので、この点からの再指定が必要になろう。植生への人為の影響は先の帰化植物やウサギの例のように間接的であろうと大きなものとなる。従って1990年から第4種避難港の工事が始まるので、原生の自然に人為の影響が心配される。

(1990. 4. 14. 友の会総会・於北大)

## カントリーヘッジの国から

五十嵐 博

何年か前に一冊の絵本を買った。今は会社の本棚に他の絵本と共に並んでいるその絵本は、イギリスのジョン・T・ホワイトが文章を、エリック・トーマスが絵を書き、鈴木晶が訳した「カントリーヘッジ」という本である。

昨年12月の初めの頃、仕事の関係もあり、ナショナル・トラストやバードサンクチュアリを見るため英国を一週間程旅行した。

ロンドンに三泊した後は、イギリスの郊外の田園風景やウエールズ地方のある西海岸などを見て回った中で印象強く残っているのが、今年の干支である羊達の群れと、彼等が逃げ出さないための石垣や生垣、木柵などであった。

この生垣のことを、英国ではカントリーヘッジと呼び、かの地の景観構成の特徴ある姿のひとつとして有名である。

あまりにもハードスケジュールのため、生垣のいい写真が撮影できなかったが、絵本にあるように、サンザシの木などを主体にツルバラなど比較的トゲのある、実のなる木を多く使っていた。

きれいに刈り込んでいる物や、手入れのまったくない所もあり変化に富んでいたが、羊の群れと牧草の緑、そして、カントリーヘッジのます目や丘に描く曲線の美しい流れは人工美とはいえず、すばらしいものであった。

サンザシは英名をメイフラワーと言い、アメリカ大陸を発見した有名な船の名前と同じである。

白いその花が、5月の花そのものである。トゲの多い木は羊を飼うには都合がいい。森を切り開き牧草地に切り替えた代償に小鳥達のために木の実はプレゼントできる仕組みでもある。

また、生垣があることで緑の計画の中で、この

カントリーヘッジを作る事を奨めている。野鳥を誘致するためには食餌木を植栽することが、良くいわれるが、同時にブッシュを作ることも重要である。

ひさしぶりに、この本を開いて読んでみるとこんなことが書いてある。「かつてないほど、鳥やけものは垣根を独占しています。生垣は自然の鎖であり、国じゅうに広がっている50万マイルのけものみちです。上着の哺乳類の全種類の半分、爬虫類の全部、鳥類の5分の1が、生垣に見出されます。中略。約40種類の鳥が垣根に巣を作り、えさもそこで得ます。垣根は野生の花の陳列棚でもあります。その種類は、森よりも、野原よりも多く、一千種以上が知られています。」イギリスにおけるカントリーヘッジは自然保護の上からだけでなく、かつては燃料である薪を供給したり、その周辺の草花が民間の漢方薬のように利用されたりもしてきた。

今後、時代の流れの中で自然環境を創造する時が近付いていると思われる。カントリーヘッジの考え方も、その一つの手法として採用したい自然環境創造手法(エアコップ)の例ではなかろうか。

